



日本の近代建築を支えた
建築家の系譜

立学院大學

はじめに 6
工手学校・早分かり 8

I 工手学校から工学院大学へ

- | | | |
|--------------|-----------------|----|
| 藤森照信 | 工手学校の創立期を飾った四人 | 18 |
| 茅原健 | 工手学校物語——造家学科を中心 | 23 |
| コラム マルチなスーパー | 渡邊洪基 | 32 |

II 輝かしき先輩たち

類洲環

- | | | |
|--------|------------------------|-----|
| 山本鑑之進 | 日本近代建築の重要な場面に立ち会つた | 36 |
| 久保田小三郎 | 日本のアルヌーヴォーの誕生にその名を残す | 44 |
| 矢部又吉 | 銀行建築の傑作が外壁保存されて二一世紀に残る | 52 |
| 小林福太郎 | 社寺建築に独自の道を切り開いた | 64 |
| 熊澤榮太郎 | 大阪を本拠地に五〇件の建築を残した | 74 |
| 小林正紹 | 明治神宮外苑シンボル「絵画館」を設計した | |
| 福井房一 | 工学院大学建築学部卒業の海外留学・第一号 | |
| 石川文二郎 | 「高崎観音」を実施設計した | 108 |
| 内井進 | 河村伊藏を父に、内井昭蔵を息子を持つ | 118 |
| 友田薰 | 江東楽天地は、今の東京ディズニーランドなのだ | 128 |

III OBの足跡を追う

浅羽英男

皇室建築と工手学校 162

建築コンペと工手学校 171

蔡龍保

戦前期工手学校卒業生の台湾における活動——八板志賀助を事例として 179

工手学校卒業生と台湾總督府の土地調査事業 185

飯田豊二と日本統治時代初期の台湾鉄道 193

進藤熊之助と日本統治時代初期の台湾鉄道 200

筑波山測候所と福満繁記 209

木下益治郎をめぐる資料収集 216

コラム 東京大学と工学院大学古市公威の銅像 224

おわりに 226

巻末資料 工手学校卒業生「宮内省 内匠寮」技師の在籍期間と作品 230

原稿掲載の『NICHE』表紙 234

参考文献 236

執筆者プロフィール 232

239

加藤隆弘

本書は、工学院大学創立一二五周年と、日本初の「建築学部」の創設を記念して、建築学部同窓会が発刊するものです。一九九九年から二〇一二年まで同窓会誌「ZICHE」に連載した、工手学校出身者の活躍の系譜を中心にまとめました。明治維新から近代国家をめざした日本が、技術教育にどのように取り組み、当時の学生がどのような情熱を持って応えたか……卒業生たちの軌跡をとおして「建学の精神」を見つめ直すよい機会であると考えております。

卷頭では近代建築家の藤森照信教授に、創立当時の教育環境を語っていただきました。それは日本の近代建築の基礎を築いた辰野金吾をはじめ大変豪華な教授陣によつてなされたという事実です。この記述から卒業生たちの活躍振りとその系譜が初めて明らかになりました。

工手学校の歴史に造詣が深い茅原健先生は、その筆致の中で創建当時の明治という時代背景と、造家学科（建築学科）の学生たちの授業や生活環境について生き生きと描いています。築地校舎は創立後わずか九年（明治二九年）で焼失しました。しかし、明治天皇の下賜金によつ

て校舎が短期間に再建されたことは、既に工手学校が国家的および社会的に大きな役割を担つていたことを物語っています。その校舎も関東大震災（大正二年）で再び灰燼に帰し、昭和三年に現在の新宿の地へ移転する歴史へとつながっています。

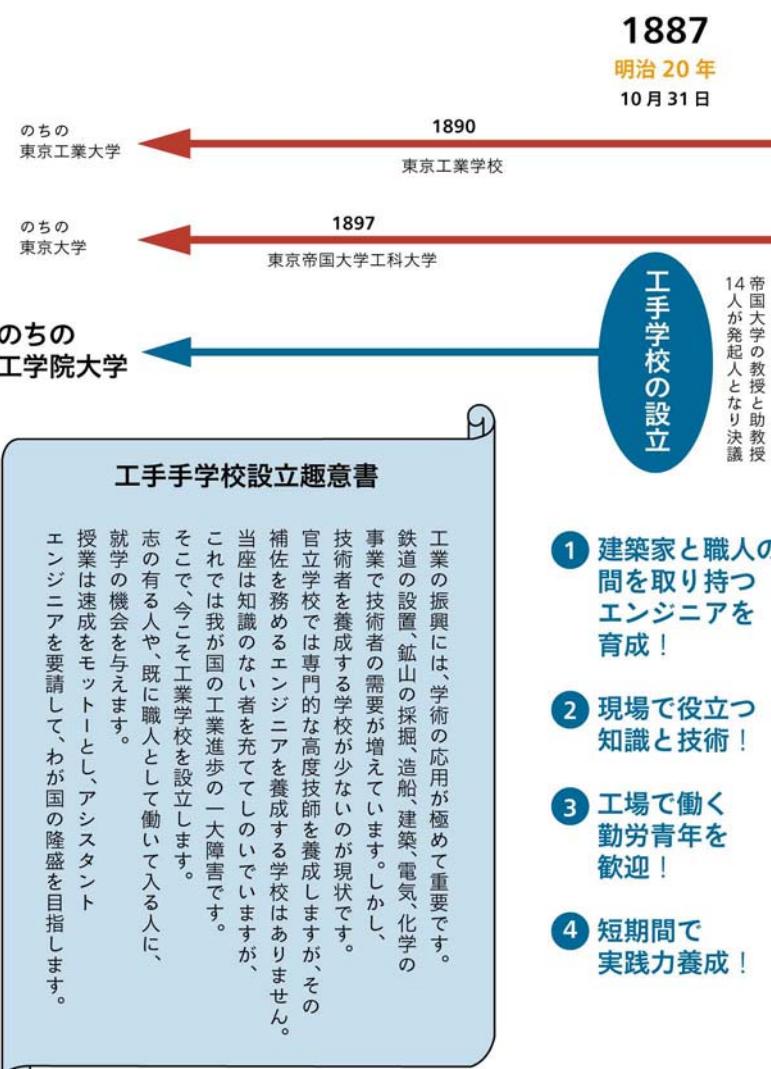
第Ⅱ章には類洲環氏による連載記事「輝かしき先輩たち」を収録しました。氏は全国に建築された作品を毎年訪ね歩き、それぞれの人物像と人間模様を描写で蘇らせ、楽しい読み物に仕上げました。

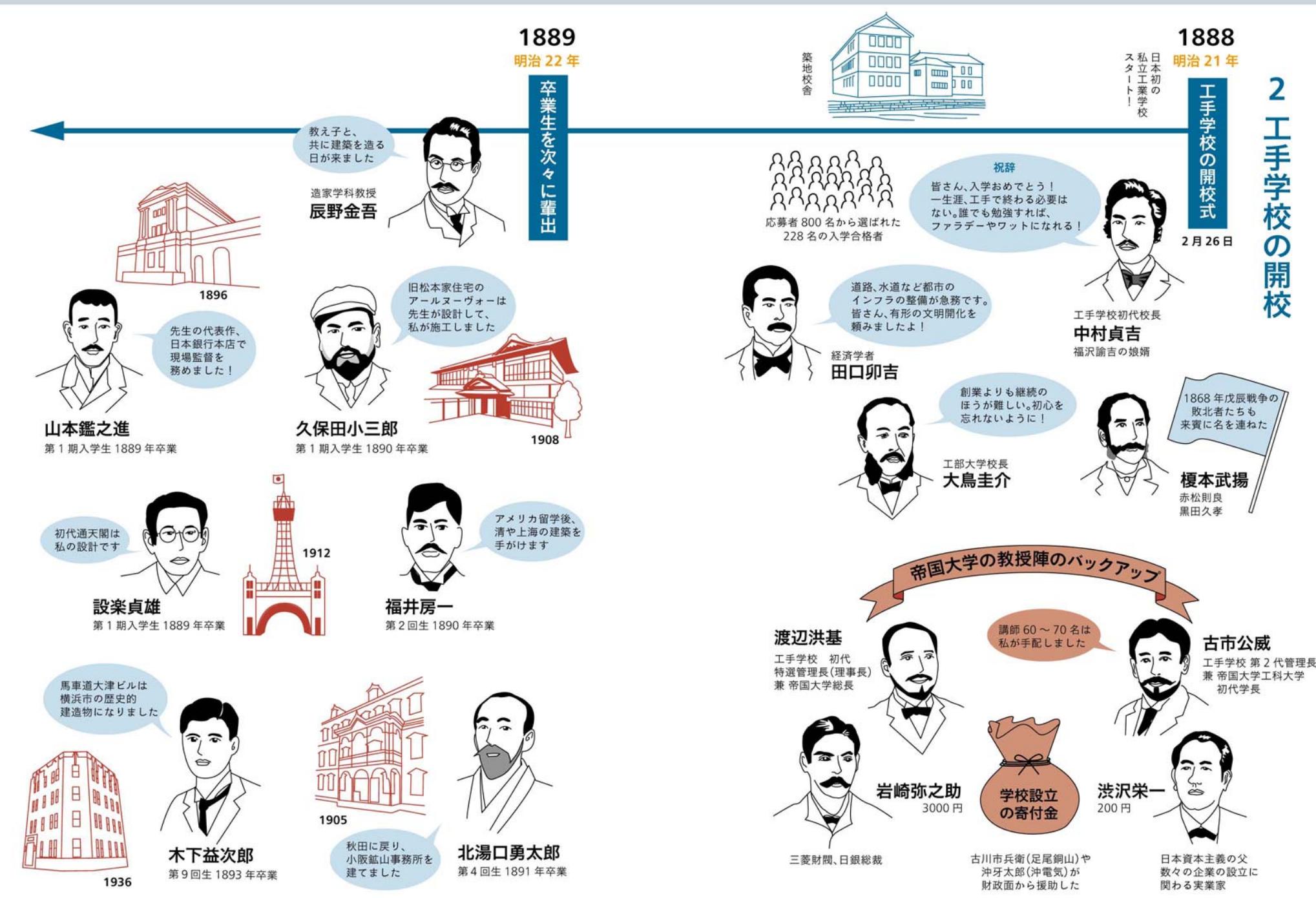
最終章では外部研究者の方々が日本の近代建築の隠れた系譜を綴り、工手学校から現代へのつながりを、幅広い視点で紹介しています。

工手学校（明治二一年～昭和三年）の当初の就学期間は、夜間だけの一五ヶ月でした。いくら時代の要請があったとはいえ、今では信じがたい速修の専門教育です。しかし、当時の勤労生たちは、精一杯に基礎技術を学習し、優れた教師の熱意と期待に応えて大きく成長しました。現在、高度に複雑化した社会では、教育年限のさらなる凝縮が求められています。創立一二五周年を迎える「建築学部」の創設は、工手学校建学の精神に立ち返り、教育の原点を見直し、次の時代への飛躍を願うものです。（工学院大学建築学部同窓会会長）

工手学校・早分かり

1 設立の背景





column マルチなスーパーヒーロー 渡邊洪基

工手学校の創立者である渡邊洪基は、明治時代に八面六臂の活躍をみせた。官民学での働きを順に見ていこう。まず、外務省の仕事としては、岩倉使節団としてアメリカにおもむいた事や、オーストリア、イタリア、スイスの大使館に勤めたこと、衆議院議員や東京府知事を務めたことが挙げられる。次に、民間では関西鉄道や両毛鉄道の社長に就任し、帝国商業銀行や芝銀行の役員を務める傍ら、さまざまな会で役付きになり「三六会長」と呼ばれた実績がある。そして大学人としては、学習院大学、帝国大学、工手学校、東京経済大学のトップをつとめた。

なぜ、彼は引く手あまたの活躍ぶりを見せたのだろうか。その答えは、渡邊がしたためた数々の答申書、意見書、条約にあるだろう。彼は状況をまとめて整理する天才だった。問題点をただちに理解すると、自ら行動し周囲の要求を実現していく。また、海外事情にも精通して

いたため、日本が歐州諸国と肩を並べるための方策を唱えることができた。さらに、若い頃から多くの大人に引き立てられた経験を活かし、自らも積極的に若手を登用していた。公平で広い見識を持つ彼は次世代の育成に余念がなかつた。妻の貞子にさえ、オーストリア駐在に備えて英語とドイツ語の学習を命じていた。工手学校は、そんな渡邊洪基が四〇歳の時に発案した学校だ。イギリス帰りの化学者、二九歳の中村貞吉を校長に抜擢し、ロンドン帰りの辰野金吾、パリで学んだ古市公威など、海外事情に明るい三二歳前後の創立メンバーを教員に据えた。彼らが一年半でエンジニアを養成する夜学を作ったのは、殖産興業という時代の要請に応えるためでもあるが、速習のカリキュラムを可能だと信じたのは、自分も猛勉強を経験していたからだろう。食うや食わざの懐具合でも授業料を捻出している工手学校の学生たちに「勉強さえすれば、誰でもひとかどの人物にな

れる」そう説いた教員陣も、若い頃には苦学を重ねた先輩であった。

断続的に戦争が続いた明治から大正時代にかけて、近代化の希望を支えたのは、勉強すれば立身出世が可能になるという筋書きだった。渡邊洪基の生涯を追うと、常に勉強を続けていたことがわかる。幼少期は地元福井でいくつもの学校に通い蘭学をマスターした。さらなる教えを乞うて、中村貞吉を校長に据えた。彼らが一年半でエンジニアを養成する夜学を作ったのは、殖産興業という時代の要請に応えるためでもあるが、速習のカリキュラムを可能だと信じたのは、自分も猛勉強を経験していたからだろう。食うや食わざの懐具合でも授業料を捻出して、来ている工手学校の学生たちに「勉強さえすれば、誰でもひとかどの人物になれる」と同義だからだ。

今も工学院大学の新宿キャンパスの一階に、渡邊洪基の胸像がある。その姿は、かつて情熱をもつて学生を見守つた人が確かに存在したことを私たちに知らせる。ハカラナ洋装に身を包み、ジヨサイア・コンドルが建てた鹿鳴館で妻とダンスに興じた渡邊は、西欧流の社交と外交を日本に導入した。工手学校の第一回の卒業式のあとにパーティの飲食形

い江戸を目指すが、横浜居留地の外国人にオランダ語がまったく通じないことにショックを受け、英語の習得を決意する。かつて同じ体験を味わい、独学で英語を習得した福沢諭吉は、初期の慶應義塾で英語を教えるかわりに、一九歳の渡邊も教壇に立たせた。こうして、渡邊は学びながら教えることを積み重ねていった。

しかし渡邊は学者にはならず、官僚として國を支える道を選んだ。それでも伊藤博文は、ある分野に精通した学者ではなく四つの学部をまとめあげる人物が必要だとして、渡邊に帝国大学の初代総長を任命する。渡邊は与えられたポジションをまつとうした。高邁な理念を横軸に、人を縦軸に配置して、工手学校を始めとする組織をいくつも織り上げた。収入と支出が合わなければ、奨学金制度や互助会も組織した。学校運営で学んだ手腕を、銀行や鉄道会社、ひいては日本という国づくりに發揮した。渡辺栄一が工手学校に何度も寄付金を提供したのは、こうし



紀

た渡邊の姿勢に共感したからではないだろうか。若い人を育てることは、国の未来を作ることと同義だからだ。

今も工学院大学の新宿キャンパスの一階に、渡邊洪基の胸像がある。その姿は、かつて情熱をもつて学生を見守つた人が確かに存在したことを私たちに知らせる。ハカラナ洋装に身を包み、ジヨサイア・コンドルが建てた鹿鳴館で妻とダンスに興じた渡邊は、西欧流の社交と外交を日本に導入した。工手学校の第一回の卒業式のあとにパーティの飲食形



福澤諭吉



日本銀行本店（1896年）



「時事新報」（明治21年）掲載の学生募集広告

工手学校——各専門技師の補助たるべき
工手を養成する学校

山本鑑之進——一八六四年（元治元年）一月一五日、江戸は本郷丸山の備後・阿部藩の江戸下屋敷に生まれる。鑑之進の父・晴次は阿部藩の江戸留守居役という要職にあり、廢藩置県の後は阿部家の家令として新しい事業を推進していった。

養蚕と茶の栽培、足軽長屋を活用した貸家業を展開する一方で、邸内の一角三六〇坪を無償で提供して「誠之小学校」の創設に協力したりした。そして一八八年（明治一七年）、生糸と茶業に代わる事業として、邸内を区画整理し、本格的な貸家・貸地業への転換を図った。現在も穏やかな町並みを残す東京都文京区西片町は、第二次大戦が終わるまで阿部家により厳選された。住人の中には、伊藤忠太、関野貞、武田五一、田辺淳吉



Kannoshin Yamamoto

1864-1924

山本 鑑之進

日本近代建築史の
重要な場面に立ち会つた

「日本銀行本店」。設計…辰野金吾、施工…直営。

明治中期の代表的な様式建築。日本人建築家の設計による最初の中央国家建築であり、お雇い外国人建築家の時代から、

日本人建築家の本格的な活躍の時代へと移行する記念碑的な建物である。
（総覧日本の建築・第3巻／東京）／日本建築学会／新建築社／一九八七年）

日本近代建築史上に燐然と輝く「日本銀行本店」の施工は
“直営”である。この“直営”に従事した人こそ山本鑑之進といい、

工手校建築学科の第一回卒業生に他ならない。

本書のトップを飾るにふさわしい、眩しくも輝かしき先輩である。

矢部 又吉

（銀行建築の傑作が
外壁保存されて二一世紀に残る）



Matakichi Yabe

1888-1941

東京三菱銀行横浜中央支店ビルは、
横浜市における文化的・歴史的価値を有する重要な建物であるとともに、

横浜市の都心の景観に風格と歴史の厚みを加える貴重な遺産でもあります。
支店の統合移転の後も、このかけがえのない建築を後世に伝える

保存活用のための道を検討いただけますならば、誠に幸いに存じます。

（『東京三菱銀行横浜中央支店ビルの保存に関する要望書』／日本建築学会
／一九九八年五月一八日）

この「東京三菱銀行横浜中央支店ビル」を設計したのは、

矢部又吉。——工学院大学の『輝かしき先輩』の一人であった。



旧梅窓院（1925年）

ドイツ系人脈の最後を
飾るのに、何故か地味なのだ

筆者が矢部又吉の名を最初に知ったのは『日本の建築家』である。ここには近代から現代にかけての建築家六七三人が紹介されている。矢部又吉は七五番目に、工学院大学卒業の最初の建築家として登場する。ちなみに、又吉の後に続く出身者は、松本與作、藏田周忠、南迫哲也、石田信男、高谷雄厚……の五人である。『日本の建築家』では、こう記されている。